

## 松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】 箕曲在弘

【所属】 (助成決定時) 早稲田大学大学院

【研究題目】 換金作物栽培地域における持続可能な世帯経営の実践に向けて：  
南ラオス・コーヒー栽培農村における家計調査から

### 【研究の目的】

換金作物の導入は、本当に途上国の人々の生活を貧困に晒してしまうのか。本研究の目的は、この問いをめぐって南ラオスのコーヒー栽培地域であるパクソン郡において、世帯の家計を中心とした現地調査を試みることにある。またこの結果から持続可能な世帯経営の方法を提案する。

ラオスにおいてコーヒーは、チャンパサック県パクソン郡を中心としたボラベン高原において生産されてきた。伝統的に陸稲の栽培を中心として、多様な作物を同時に栽培する焼畑耕作を行っていた人々は、80年代以降、コーヒー豆の生産を中心とした生業を営むようになった。

市場経済へ包摂された状況において、現金獲得の際に負わねばならないリスクに農民世帯はどのような家計戦略を持って対応しているのだろうか。1997年にはラオスも ASEAN に加盟し、今後、さらに自由貿易協定が結ばれていく可能性を考えると、換金作物に依存した地域における家計のあり様を詳細に調査することには重大な学術的、社会的意義があると考えている。さらに申請者は本調査結果から当該地域における持続可能な世帯経営のあり方について提案するつもりだ。

### 【研究の内容・方法】

上記の研究目的に従って、パクソン郡のなかでも、地理的条件の違う2村を選び、換金作物を中心とした家計の収支調査を行った。調査対象地域では、2団体の NGO がコーヒーのフェアトレードを実施している。また、ラオ人と少数民族であるラベンが一つの村に混在している。そこで、各村において、「フェアトレードへの参加世帯、かつラオの世帯」「フェアトレードへの非参加世帯、かつラオの世帯」「フェアトレードへの参加世帯、かつラベンの世帯」「フェアトレードへの非参加世帯、かつラベンの世帯」という四つの集団に分け、質問紙を中心とした調査を行った。2村合計で120世帯分の情報を入手した。

その際、以下の項目について調査した。世帯の構成員とその年齢、職業などの一般的なデータに加えて、「栽培している作物の種類と耕地面積、収穫量」「年間の収入とその内訳」「年間の支出とその内訳」「コーヒー豆の売値」「栽培にかかる費用（肥料、果肉除去機使用料、電気代、収穫時の労賃など）」「移住、出稼ぎの状況」「教育への投資」「借金の有無」「税金」「食費の割合」など約50に渡る質問項目を並べた質問紙調査を行った。質問項目はメキシコのコーヒー生産農村の実態を分析した研究書である Daniel Jaffee 著“Brewing Justice” (2007) を参考に作成した。

また、調査期間中は、上記の量的データを収集するだけでなく、住民たちと一緒に、除草作業や収穫作業を行い、さらには輸送と販売まで同行し、参与観察を行った。ここから数字では現れてこない彼らの生活状況を把握した。

### 【結論・考察】

彼らはコーヒーを売却することで得た現金を使って米を購入している。だが、それ以外の食糧は、かなりの程度、家屋の裏庭の菜園やコーヒー農園において栽培したものを自家消費していることがわかった。そのため支出の中で、米以外の食費に費やされる比率は比較的少ない。もっとも収入の多い世帯ほど、日常の食糧を市場で購入する傾向がある。だが、市場から遠い村ほど、自家消費に依存する程度は高くなっているようである。

だが、彼らのコーヒー栽培は、これまで粗放的なもので、肥料を撒くことすらなかったが、収穫量が年々減少してきており、有機肥料の導入が積極的に行われてきている。この傾向によって、彼らは肥料購入費や収穫時の臨時労働者に支払う賃金などが必要になってきており、生産のための経費が増加しつつある。その上、借金をする必要もでてきており、このような支出の増加や借金は、彼らの生活を不安定にさせる要因になる可能性がある。